

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32614

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2013～2015

課題番号：25704015

研究課題名(和文)伊豆修験と「伊豆峯」辺路の考古学

研究課題名(英文)Field survey and archaeological study of Shugendo in Izu peninsula

## 研究代表者

深澤 太郎 (Fukasawa, Taro)

國學院大學・研究開発推進機構・准教授

研究者番号：60453552

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では、神仏分離によって廃絶した伊豆修験と、その主要な年中行事である伊豆峯辺路行の実態を検討した。具体的には、262ヶ所に及ぶ伊豆峯の拝所について、関連史資料の検討による現在地比定を試みた上で、考古学的な現地踏査を実施した結果、走湯山と伊豆修験の展開を、9世紀から19世紀に至る5つの段階に区分して理解することが可能となった。また、併せて拝所の一つである修験窟の3次元記録保存も実施した。

研究成果の概要(英文)：This archaeological study investigated the Shugendo(Japanese mountain asceticism) in Izu peninsula which extinct by separation of Buddhism and Shintoism. After 262 Izu-mine worship spots was surveyed, we could divide the history of Izu Shugen religion into 5 stages. And also we did three dimensional measurement about the Shugen-kutsu(religious cave) which is one of the Izu-mine worship spots.

研究分野：考古学

キーワード：考古学 歴史考古学 宗教考古学 修験道考古学 修験道 宗教学 伊豆国

1. 研究開始当初の背景

(1) 走湯山と伊豆修験

前近代の伊豆半島には、数多くの修験者たちがいた。彼らの拠ったところは、明治の神仏分離・廃仏毀釈によって伊豆山神社と改められるまで、走湯権現、あるいは伊豆権現として知られた霊場である。鎌倉時代以降、かの箱根権現と共に、二所権現と称されることもあった走湯権現は、相模地域を中心とする東国の代表的な山岳信仰の拠点と言って差し支えない。

その初源については、幾つかの縁起が語られているが、最も古い記録である12世紀後半の『伊呂波字類抄』によると、承和3(863)年に走湯権現の示現を得た甲斐国の賢安が、走湯山光明寺を建立したことはじまるとされる。一方、鎌倉初期の成立と見られる『走湯山縁起』では、応神年間に日金山へ飛来した円鏡を松葉仙人が祀ったことに発端を求め、木生仙人・金地上人・役行者・弘法大師らの挿話が語られた後、ようやく賢安による走湯権現の感得へと話が及ぶ。また、『神道集』では、走湯権現と箱根権現を姉妹の神と位置付けている。ともあれ、『梁塵秘抄』に「四方の霊験者は伊豆の走湯、信濃の戸穩、駿河の富士山、伯耆の大山」とある通り、遅くとも平安末期には、山中の修業に身を投じた行者たちが実在したことは疑いない。その後の伊豆山では、光明寺が退転したのち、鎌倉時代には真言宗密厳院が中枢を担い、醍醐寺三宝院の系列が有力となった。降って16世紀末には、豊臣秀吉による小田原攻めの影響を受けて一山灰燼に帰したが、ほどなく徳川家康が高野山系の般若院を別当として復興を進めた。

(2) 知られざる伊豆修験の実態

このような伊豆山の歴史的展開については、既に文学・文献史学・美術史学・考古学など、様々な立場から研究が試みられており、通史的な理解も進んできた。中世以降の経塚や寺坊の実態については、考古学的な調査によって具体像が明らかになりつつある(藤本ほか編 2006・2007)。しかし、行場や峯中の状況については、一部の研究者が触れているのみであり(山本 2004、宮家 2010)、豊臣秀吉の北条攻めに伴う一山の炎上もあってか、修験者や修行そのものに関する直接的な史料も、宝暦11(1761)年の『伊豆峯次第』(西牟田校注 1990)など、近世のものに限られている憾みがある。

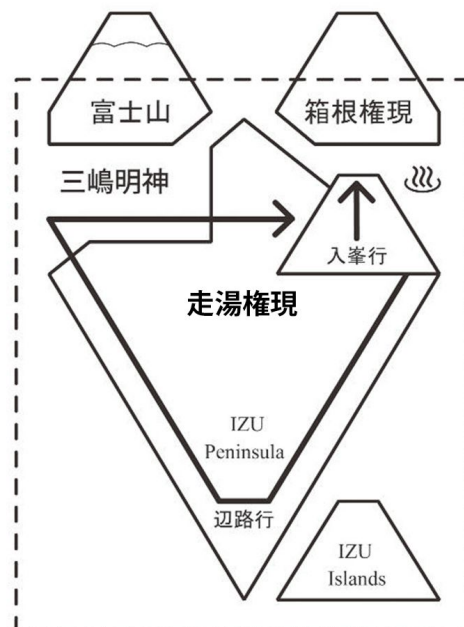
2. 研究の目的

とは言え、この『伊豆峯次第』が、年末年始(12月15日~1月28日)に伊豆の行者が半島を一周する辺路行の行程と、その概略について触れた貴重な文書であることは異論がない。そこで、特に注目されるのは、行中12月25日に訪れることとなっている「井田ヶ崎」の「心檀堂之岩屋」である。そこは、前後の行程から、現在の下田市三穂ヶ崎に相

当する地点と思われるが、その突端の海蝕洞窟内部には、宝徳元(1449)年から寛文2(1662)年にかけて行者たちが残した墨書や、不動明王の図像が残されていた。墨書の中には、日付を読み取ることのできるものもあり、12月25日の例が多く見られることは、既に指摘されていたところである(日野 1962)。つまり、18世紀の文書に記録されている修験者の辺路行が、中世に遡って行われていた事実を、考古学的に検証することができるのだ。換言すれば、『伊豆峯次第』の記載に従って入念な踏査を試みることで、「心檀堂之岩屋」以外の拝所・行場においても、行の具体的な実態や、その年代的位置付けに関する情報の獲得が期待できるのである。

一方、走湯権現の中枢をなす熱海地域には、市街の走湯周辺にあたる下宮と、現在の伊豆山神社境内にあたる新宮があり、背後に岩戸山や日金山が控えている。残念ながら、この走湯から日金山にかけて抖擻する入峯修行関係の文書は全く知られていない。しかし、この入峯行についても、考古学的な立場から峯中を踏査することで、その開始から衰退に至る歴史的展開を把握することができよう(時枝 2005)。

言うまでもなく、大峯山・白山・日光などに比べれば、伊豆の修験に関する考古学的な情報は圧倒的に少なく、研究の手も殆ど及ばされていない。であればこそ、遺跡を点的に調査してきた考古学者の視点に加えて、行場と行場を結ぶ道中を線的に捉え、信仰空間を面的、立体的、ひいては4次元的に捉えていた行者の視点から、地道な踏査を繰り返して資料の掘り起こしを図っていくしかない。その上で、地域的に隣接・重複する箱根権現信仰・三嶋明神信仰をはじめとする地方霊山等との比較を試み、具体的な伊豆修験の構造・歴史像について、一定の見通しを立てていくことが求められる。



### 3. 研究の方法

#### (1) 概要

本研究の中核は、近世文書等に描かれた伊豆修験の入峯・辺路ルートを踏査することで、修験者の活動した拝所を実地に確認し、その初源期から消滅にかけての様子を考古学的に把握するところにある。特に重要な事例は、必要な測量を実施することで資料的充実を期す。そして、かかる成果を、既往の考古学的情報や、他の地方霊山などとの比較によって相対化し、伊豆修験の構造・歴史像を理解していく。

具体的な手順としては、「伊豆修験に関する史資料の把握」・「辺路ルートの踏査」を踏まえてケーススタディによる研究法の検証を行った。そして、現地踏査を継続しつつ、収集史資料から得られた情報の総括的評価を試み、「伊豆修験の構造・歴史像」を明らかにした上で、研究成果の公開を図った。

#### (2) 伊豆修験に関する史資料の把握

まずは、関連史料の整理を実施し、『伊豆峯次第』・『伊豆権現領略絵図』や、『伊豆権現縁起大略』に附せられた「伊豆山神社四系図」などを対象に、近世段階における辺路ルート・入峯ルートや、拝所の状況を検討することから作業を開始した。

しかし、『伊豆峯次第』・『修験古実書上』所載の年中行事が、何れも辺路行のみに関心を払っているだけでなく、伊豆山・岩戸山・日金山における山頂遺跡の存在も確認されていないため(大和久 1990)、日金山方面を目指したものと推定される入峯行の実態を考古学的に検討することは難しい。もっとも、伊豆峯辺路行のルートにも日金山から伊豆山までの道程が含まれている。従って、本研究においては、専ら辺路行の検討に重点を置くこととした。即ち、『伊豆峯次第』に記述に記述された拝所の現在地比定を進め、これを踏査する方針に特化したのである。

なお、拝所比定地の考古学的情報に関しては、これまで國學院大學が主体的に実施してきた日金山経塚出土資料の調査(吉田編 2007)、伊豆山経塚・走湯権現関連遺跡群の発掘調査・関連資料調査(藤本ほか編 2006・2007)や、地元教育委員会等による調査研究成果の悉皆的な収集を進めた。

#### (3) 辺路ルートの踏査

理想的な形としては、辺路ルートの全てを入念に踏査したいところではあるが、『伊豆峯次第』に見える拝所だけでも約 260 ヶ所を越えている。また、海浜部の拝所は、地震や津波の影響もあってか、大方の地点で埋蔵文化財の遺存が認められなかった。そこで、文書に特記事項のある拝所や、参籠する宿所、修験窟といった、考古学的成果の有望な地点を優先しつつ踏査を実施した。なお、伊豆修験に関する近世文書の記述内容は中世まで遡及し得るか、考古学的踏査成果から伊豆修験の展開を把握できるか、といった研究上の妥当性については、既にパイロットスタデ

ィを行ってきたところであり(深澤 2012・2013、尾上 2015)、当事業における資料的充実を経て、概ね検証できたものと考えている。

### 4. 研究成果

#### (1) 概要

本研究においては、伊豆修験に関する史資料を整理した上で、262 ヶ所に及ぶ伊豆峯辺路行の拝所、及びその関連地点の現在地比定を行い、かつて行者たちが経巡った拝所の現地踏査を実施した。このような、極めて基礎的かつ地道な作業の成果については、部分的に論文・報告・口頭発表等の形で公にできた(深澤 2014、尾上 2015、深澤 2016、深澤・林・植田 2016)。

#### (2) 史料に見る伊豆修験

伊豆修験に関する史資料については、14 世紀の『走湯権現當峯邊路本縁起集』(津田編 1996)、18 世紀半ばの『伊豆峯次第』(西牟田校注 1990)、19 世紀前半の『修験古実書上』(齋藤 1917)などが広く知られてきた。これらの史料からは、伊豆峯辺路行の萌芽が史料上 14 世紀に遡ることや、近世後期における伊豆修験の実態を読み取ることができる(深澤編 2012)。

加えて、新たに熱海市伊豆山の円光院千葉家資料を実見する機会に恵まれたことは、大きな成果であった。本尊である不動明王像、輪宝袈裟、法螺貝、護符・牛王宝印版木、文書類は、近世走湯山における修験七坊の上席と定められていた円光坊の姿を物語る一括資料であり、極めて貴重な歴史遺産と評価し得る。この円光院資料については、既に『熱海市史』(熱海市史編纂委員会 1967・1972)や、その編纂に伴う史料調査などによって部分的には明らかにされてきたが、熱海市が収蔵する当時の調査記録以外に、全貌を窺い知る術がなかった。本書に掲載したものは、未だ整理途中の中間報告であり、遺憾ながら未だ現物を確認できない既出資料がある一方、新たに発見された未知の資料も含まれており、引き続き調査を進めていきたい。

なお、円光院資料の興味深い点は、前近代の修験に関する一括資料であることはもとより、修験の末裔が、どのように近代を生き抜いたのかを物語っているところにある。従来、伊豆修験については、明治の神仏分離と廃仏毀釈によって、壊滅的な打撃を受けたものと考えられてきた。しかし、近現代における千葉家の動向を追求すると、そう単純ではなかった事実が見えてくる。神仏分離によって千葉家は禰宜に転じたが、神道的な行法を採り入れた御嶽信仰などを参考にしつつ、旧円光院の不動明王信仰を、恐らくは昭和初期まで維持していた可能性が高くなってきたのである。この点についての検討は、事業実施期間に終えられなかったため、別稿にて改めて論じたい。

#### (3) 辺路ルートの踏査

辺路ルートの踏査については、本研究の前

身事業を含めると(深澤編 2012・2013)、概ね伊豆半島を一周する全行程を跡付けることができた。しかし、海浜部の拝所は、地震や津波の影響もあってか、大方の地点で埋蔵文化財の遺存が認められていない。『伊豆峯次第』が心檀堂之岩屋(拝所 65)と呼ぶ下田市白浜の修験窟も、海岸近くの危険地帯に位置し、行者が遺した洞窟内の墨書も劣化が懸念されることから、下田市教育委員会による指導のもと、(株)パスコと共同して3次元計測を実施し、記録保存の措置をとっている(深澤・林・植田 2016)。

本研究では、このような各拝所に関する基礎データとして、『伊豆峯次第』・『豆州志稿』の記述や、関連埋蔵文化財・伝世文化財を集成した。この一覧表が、伊豆峯拝所の展開を検討する上での前提となる。但し、伊豆峯の拝所を繋ぐ辺路は、その殆どが村々を繋ぐ生活道路と重複した巡礼路であるため、山中の修験道遺跡とは異なり、山頂祭祀の始まりや、峯入り修行の展開を示す明確な考古資料を見出しにくい憾みがある(時枝 2005)。

これら、辺路に点在する伊豆峯の各拝所は、元来個別の事情によって営まれてきたものであり、斉一的な推移を辿ったものと考えすることはできない。そこで、考古学的に走湯山と伊豆修験の歴史を復元するに当たっては、拝所の類型化を試み、特に「聖地」・「山林寺院」・「霊場」・「行場」に注目して、それらの出現・展開過程を検討した(深澤 2016)。ここで言う狭義の聖地とは、古墳時代の祭祀遺跡まで遡り、後に神造化していくものを指す。山林寺院は、山中に営まれた寺院であり、僧地の背景に仏地を擁するものを主とする(久保 2001)。霊場は、寺社を中心に多くの人々が参詣する宗教拠点であり、経塚などの造営を伴う例もある(時枝 2014 ほか)。そして行場は、例えば修験窟のように、行者が修行を行う空間として特化した場である。

#### (4)伊豆修験の構造と歴史像

このように、走湯山と伊豆修験の展開について、主に拝所の動向を考古学的立場から検討した結果、5つの段階に区分して理解することが可能となった(深澤 2016)。

第1段階[走湯山草創期]:第1段階は、熱海市多賀神社境内の宮脇遺跡(拝所 10)や、河津町姫宮神社旧社地の姫宮遺跡(拝所 45)など、伊豆峯拝所の前身となる古墳時代以来の聖地や、伊豆修験の中心を担うことになる走湯山(拝所 0)の山林寺院などが、個別に展開していった9世紀から10世紀頃である。熱海市伊豆山では、駿東杯と呼ばれる9世紀中葉から後葉の土師器杯も採集されており(藤本ほか編 2007)、9世紀に賢安が走湯山を開いたとする鎌倉時代の伝承も頷ける。恐らく、次第に日金山や岩戸山といった仏地を背にして、伊豆山一帯に僧地が展開していったのであろう。10世紀頃には、河津町南禅寺(拝所 48)などにおいても山寺の形成が始まったものと思われる。

第2段階[霊場形成期]:第2段階は、走湯信仰や三嶋信仰といった在地信仰の核となる祭祀空間において、明確な祭祀行為の痕跡が認められる11世紀から、走湯山や三嶋社などに経塚を伴う霊場が形成され、半島各地の神社等においても和鏡の奉納が顕著に見られる13世紀頃である。12世紀前半には、走湯山で伊豆山経塚(拝所 0)、三島市三嶋大社附近にて西岩崎経塚(拝所 250)の造営が始まり、これに続いて熱海市下多賀神社境内では下多賀経塚(拝所 11)、下田市白浜神社境内遺跡(拝所 57・63)南伊豆町翁生山普照寺附近では長者ヶ原経塚(拝所 142)、沼津市楊原神社北方では香貫山経塚(拝所 245)が営まれた。経塚は、寺院や墓地と共に地域の宗教空間を形成するものであり、このような動向も霊場形成の過程と看做すことができる。

第3段階[伊豆峯展開期]:第3段階は、修験者の行場と見られる海蝕洞穴などに考古資料が認められるようになった14世紀から、「伊豆峯」を役行者の足跡と看做す信仰が定着した15世紀を経て、それまでに形成されてきた聖地や霊場を拝所として巡拝し、半島を一周する伊豆峯辺路行が定型化していった16世紀前後である。伊東市八幡野の薬師之岩屋(拝所 20)では、14世紀から参籠行が行なわれていた考古学的痕跡が認められるが、概ね同時期に、伊豆峯と役行者の関わりについて詳しく触れた『走湯山縁起』・『走湯権現当峯辺路本縁起集』などが編まれるようになった。走湯山や三嶋社などの霊場や、個別の在地聖地など、それぞれ成立事情の異なる拝所を、「伊豆峯」の世界に結びつけていくためには、「外来者」である役行者の存在が求められたのであろう。

第4段階[伊豆峯変容期]:第4段階は、検討対象となる具体的な考古資料に乏しいが、伊豆峯の行場における修行より、拝所の巡拝に重きが置かれるようになったと見られる17世紀以降である。『伊豆峯次第』によれば、薬師之岩屋(拝所 20)・心檀堂之岩屋(拝所 65)のような行場も、同じ日に参拝する複数の拝所の一つと位置付けられている。これは、伊豆峯辺路行においても、行場での修行より、拝所の巡拝に重点が置かれるようになったことを示すものかと思われる。

第5段階[伊豆峯廃絶期]:第5段階は、神仏分離と廃仏が徹底され、走湯山における一山組織が解体されると共に、伊豆修験も消滅した明治初年以降である。民衆に開かれた道ではなかった伊豆峯辺路は、神仏分離によって修験という担い手を失い、その歴史を終えた。しかし、先に触れた熱海市円光院資料が物語るように、禰宜に転じた旧修験が、新たな形で自らの信仰を守ろうとした痕跡も窺われる。そのような事情については、また稿を改めて検討しよう。

#### (5)残された課題

以上、今回の研究事業では、伊豆修験の歴

史的動向について、主に考古学的な側面から整理してきた。もとより不足の面があることは承知の上であるが、史料の乏しい修験の姿を復元する試みに、考古学という技術を活用することが可能であることを示し得た点については、些か自負するところがある。このような、歴史的現象面の理解が進んだ今、次なる課題としては、伊豆修験の世界観を掘り下げていくことが望まれよう。

そもそも伊豆修験の展開は、単独で成立し得るものではなく、古代の山岳信仰や山林仏教に始まり、密教・浄土教の影響や、熊野信仰の浸透など、様々な外的動向とも無関係ではなかった。殊に富士修験は、15世紀以降に聖護院との関係を深めるまで、長らく伊豆修験の傘下にあったことが知られている（深澤2014）。実際、建長3（1251）年の『浅間大菩薩縁起』によれば、12世紀前半に村山を整備し、富士山頂に大日寺を建立した末代も、走湯山の出身と伝えられる。また、『甲斐国誌』によると、かつて吉田口二合目の御室に祀られていた神像は、走湯山の覚実・覚台が、12世紀後半に造立したものという。従って、富士を取り巻く駿河・甲斐の修験や、隣接する箱根信仰・三嶋信仰の比較研究は、伊豆修験の位置付けを明確にするための試みであるとともに、修験道史全般の理解を深める挑戦とすることができよう。

ちなみに、14世紀の『走湯権現当峯辺路本縁起集』には、「當峯、又自中心浅間之頂、限東西為両界。故入口者胎蔵界之供養會。出口者金剛界之成身會也。浅間大菩薩、本地大日如来、中心中臺之位也。」とある。伊豆峯と、胎蔵界中台八葉院たる浅間（センゲン 正一位千眼大菩薩 = 走湯大権現）の頂より東西を、胎蔵界・金剛界と見做す、とでも解せばよいのだろうか。また、18世紀の『伊豆峯次第』は、石廊崎の神子根島（拜所 No.119）について、「陰神陽神。不二金胎の地なり。」と記している。両書の記述の間には、大幅な時代の懸隔が横たわっているものの、伊豆峯を曼荼羅世界と解している点では違いがない。このような、人間の内面的な信仰感覚と、本研究が進めてきた伊豆修験の歴史的な展開を擦り合わせていくためにも、伊豆峯をめぐる地域間の比較研究と、より具体的な宗教学的な検討を、車の両輪として実施していきたい。

<引用文献>

- 熱海市史編纂委員会 1967 『熱海市史』上巻 熱海市役所  
熱海市史編纂委員会 1972 『熱海市史』資料編 熱海市役所  
大和久震平 1990 『古代山岳信仰遺跡の研究』 名著出版  
尾上周平 2015 「静岡県伊豆市八木沢熊野神社境内採集資料」『研究報告』31 國學院大學学術資料センター  
久保智康 2001 「古代山林寺院の空間構成」『古代』110 早稲田大学考古学会

- 齋藤要八編 1917 「修験古実書上」『熱海町誌』 熱海町役場  
津田徹英編 1996 『金沢文庫の中世神道資料』 神奈川県立金沢文庫  
時枝務 2005 『修験道の考古学的研究』 雄山閣  
西牟田崇生校注 1990 「伊豆峯次第」『神道大系』神社編21（財）神道大系編纂会  
日野一郎 1962 「信仰遺跡と城址」『伊豆下田』 地方史研究所  
深澤太郎編 2012 『伊豆修験の考古学的研究』國學院大學特別推進研究助成金研究成果報告 國學院大學  
深澤太郎編 2013 『伊豆修験の考古学的研究』國學院大學特別推進研究助成金研究成果報告 國學院大學  
深澤太郎 2014 「甲斐・駿河・伊豆の初期修験」『富士山 - その景観と信仰・芸術 - 』國學院大學博物館  
深澤太郎・林大貴・植田真 2016 「伊豆国賀茂郡 心壇堂之岩屋」『研究報告』32 國學院大學博物館  
深澤太郎 2016 「「伊豆峯」の考古学 - 伊豆修験の形成と展開 - 」『研究報告』32 國學院大學博物館  
藤本強・内川隆志・須藤友章編 2006 『伊豆山経塚遺跡』 國學院大學考古学資料館・熱海市教育委員会  
藤本強・内川隆志・須藤友章編 2007 『走湯権現関連遺跡群遺物調査報告書』 國學院大學考古学資料館・熱海市教育委員会  
宮家準 2010 「中世の伊豆・箱根・富士と修験」『山岳信仰と考古学』 同成社  
山本義孝 2004 「伊豆走湯権現をめぐる諸問題」『中世の祭祀と信仰』 静岡県考古学会  
吉田恵二編 2007 『東京都三宅村伊豆 物見処遺跡 2006』 國學院大學考古学研究室

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

深澤太郎、「伊豆峯」の考古学 - 伊豆修験の形成と展開 - 、國學院大學博物館研究報告、査読有、32 輯、2016、pp37-53

深澤太郎、林大貴、植田真、伊豆国賀茂郡 心壇堂之岩屋、國學院大學博物館研究報告、査読無、32 輯、2016、pp113-122

〔学会発表〕（計1件）

深澤太郎、よみがえる伊豆修験 - 『伊豆峯』の考古学 - 、修験道の歴史とこころ、SBS学苑、2014年11月1日、SBS学苑（静岡県静岡市）

〔図書〕(計2件)

深澤 太郎、他、國學院大學、伊豆修験  
と「伊豆峯」辺路の考古学(電子版) 214

深澤 太郎、他、國學院大學博物館、富  
士山 - その景観と信仰・芸術 -、176

〔その他〕

ホームページ等

<http://www2.kokugakuin.ac.jp/archaeology/izushugen2.html>

展示

テーマ展示 伊豆修験の道をゆく、2013 年  
5月18日～2013年9月9日、國學院大學博  
物館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深澤 太郎 (FUKASAWA, Taro)

國學院大學・研究開発推進機構・准教授

研究者番号：60453552